

トーマス・マンの『選ばれし人』における Deiktika, jetzt と hier の用例

川戸 れい子

I. はじめに

トーマス・マンの散文虚構作品の中、半数近くが、一人称現在形で語る語り手を配している。そして、その語り手によって語られる物語の部分は、原則として三人称過去形である。このような形態の作品の代表的なものを挙げれば『魔の山《Der Zauberberg》』（1924）、『ヨゼフとその兄弟たち《Joseph und seine Bruder》』（1943）、『ファウスト博士《Doktor Faustus》』（1947）及び『選ばれし人《Der Erwählte》』（1951）である。

ところで物語は、叙事的散文の一種で、アリストテレスによれば「ミメシス、すなわち模擬的再現¹⁾」なのであり、現実を模しつつ虚構を語るものである。一方、現実通常は人間の認識できる限りにおいては、3次元の空間とそして時間の内にあり、そうした時空の中で生起する事象、及び人間の行為の総体ととらえることができる。物語が現実を模する場合、この時空もともに模されて初めて、物語は現実らしさを獲得するであろうし、時間、空間の構成の仕方如何によって超現実性や異化といった様々な効果を作り出すことにもなる。

現代文学はこうした時間・空間の表現において、様々な試みを行って来た。トーマス・マンもその試みに参加した一人であり、上に述べたような語り手を配し、人称、時称の変化によって時間の奥行を表現しようとした。中でも『選ばれし人』は人称、時称の交替が目まぐるしい程で、非常に入り組んだ時間構造を示す。また作中で、語り手が「物語の精神」や時、場所に言及す

ることもしばしばである²⁾。そしてこの作品は一連の語り手作品の中、最後に書かれており、マンの語り手手法の完成された姿を示していると言える。従って、マン文学の特徴、また現代文学における時間の問題を問うにあたって、この作品はふさわしい対象であると思われる。

『選ばれし人』の語り手と人称、時称そのものに関しては、これまでも論じたことがあるので³⁾、拙論を参照して頂くとして、ここでは Zeit-, Raumdeiktika (時間、空間指示語) に注目してみたい。これらの語は、日常言語及び通常書き言葉においても、話者の時間、空間の意識を直接反映するものであり、さらにあまりにも身近な語であるため、話者が殊に意識していない、或いは無意識な時間、空間に対する感覚を表してしまふことにもなるので、作品の時間、空間構造の重要な指標と考えられるからである。またこれらの語が、どこまで他の時間・空間構成の要素と対応して、作者の意図を満たしているか、言い換えるならば当該作品の言語的統合 (sprachliche Integration) がどの程度果たされているのかを考察したい。

I. Deiktika, jetzt と hier

時間及び空間を指示する語は多数あるが、特に人間の時間・空間の意識及至感覚を直接に表出するのが、時間、空間の副詞 (Zeit-, Raumadverbien) であろう。時間の副詞には jetzt, nun, heute, morgen, gestern 等があり、空間のそれは hier, dort, vorne, hinten 等である。こうした語を用いて我々は、我々の把握している現実の時間、空間を表現する。ところで人間が「昨日 (gestern)」とか「明日 (morgen)」と言う場合、それはその人間の生きている「いま (jetzt)」を基準としており、「いま」がなければ、他の時間表現は現実的、具体的意味を失う。同様に、「彼処 (dort)」や、「前に (vorne)」 「後ろに (hinten)」を言う場合は、「ここ (hier)」が基準となる。この両者は相関するのであるが、人間の感覚としてより先に、かつ明瞭に認識される基準は「ここ」である。それは「いま」が刻々と移ろい行くのに対して、「ここ」は物理的に不動であり視覚的、触覚的にたやすく把握できるからである。そして「ここ」の把握から人間は「いま」を意識する。例えば「彼処にあった影がいまはここにある」というふうに、時間を空間から感得するのである。

K. Hamburger も言うように「いまがここに依拠するのであって、ここがいまに依拠するのではない⁴⁾」

通常の間人にとっての現実はこの「いま」を基点とする時間軸と、「ここ」を基点とする空間軸を有する関係系の中で把握されており、その限りにおいて現実性をもつ。「時間・空間関係系が、現実を時間空間的現実として記述する⁵⁾」のである。一方、物語が現実を模倣し、再現しようとする場合、現実の時間・空間関係系を模倣することになる。しかし虚構である物語は、元より現実とは異なるのであるから、その時間・空間関係系も現実のそれとは異ならざるをえない。物語は虚構の、すなわち非現実のものである時間・空間関係系をもつ。本論では虚構の物語である『選ばれし人』の時間・空間構造の特質を時間、空間の指示語から探ろうとするものである。

さて日常言語、すなわち現実の時間・空間関係系の中に生きている我々のことばでは、時間、空間の副詞はどのように使われているのか、その用法について少し見ておこう。そのためには直接話法 (Direkte Rede) と間接話法 (Indirekte Rede) を対比させてみるのが有効であろう。

人が「私はここにいる」と言う場合、「ここ」はその人の生きている現実的、具体的な場所を表す。「私はいま20才である」と言う場合も同じくその人にとっての現実のその時が示されている。この2つの文が間接話法で「彼は、～と言った」というふうに述べられるとしてみよう。

直接話法

- (1) Ich bin hier.
- (2) Ich bin jetzt 20 Jahre alt.

間接話法

- ① Er sagte, er sei da.
- ② Er sagte, er sei damals 20 Jahre alt.

このように間接話法文では、hier (ここ) と jetzt (いま) と言うことはできない。これは言説の時間・空間系の原点と、話者の時間・空間系の基点が同一でないためである。この言説の時間空間系の基点を、J. Hohmeyer は Orientierungszentrum と呼び⁶⁾、Hamburger は Origopunkt と呼ぶが⁷⁾、い

ずれにしても現実を言い表す言説の時間・空間関係系の基点は、話者の立つその場所とその発話の時、すなわち生きて在る話者の「ここ」と「いま」であるが、これは必ずしも物理的、客観的な「ここ」、「いま」である必要はない。話者の主観による「ここ」と「いま」でもよいのであるが、現実の言説として受容されるためには、話者の実存が基礎とならねばならない。現実を述べる言説の時間・空間関係系の基点は、話者の実存に裏付けられた「いま、ここに」なのである。一方、間接話法では話者の立つ場所と時は、言説内容の場所と時とは異なるので、空間、時間の指示語は話者の実存とは無関係な客観的、中立的なものでしかありえないことになる。従って時間、空間の副詞の中でも、本論で注目すべきは、どのような言説の中で用いられてもさしつかえないと考えられる客観的、中立的な「その場所 (da)」や「当時 (damals)」などではなく、謂わば実存的な「いま、ここに」を基点とする時間軸、空間軸の上にある語、つまり、「昨日 (gestern)」、「今日 (heute)」、「明日 (morgen)」や「彼処 (dort)」といったものである。これらの語はいずれも間接話法文では用いることができない。念のため文例を挙げておこう。

直接話法

(3) Sie reist morgen ab.

(彼女は明日旅立つ。)

(4) Sie wohnt dort.

(彼女はあそこに住んでいる。)

間接話法

③ Er sagte, sie reise am nächsten Tag ab.

④ Er sagte, sie wohne da.

ところで、直接話法と間接話法における時間、空間の副詞の用法の差異を上にも述べた訳だが、物語や小説の文章形態は、一見すると間接話法に似ているようにも思われる。一人称形式のみで語られるもの、すなわち Ich-Roman (日本文学でいう私小説とは必ずしも一致しないことを付言しておく) は別として、物語乃至小説は原則として3人称過去形で書かれ、言説内容の時間・空間の基点は作者のそれと同一ではないと考えられるからであ

る。また、登場人物の発する言説があり、「彼は～と言った」という形の文が数多く現れる。さらに本論で取り上げる作品のように、1人称現在形で語る語り手が介在している場合は、なおのこと間接話法文に似かよってくる。しかし、日常言語の間接話法文は、話者の「いま、ここに」から直接発せられていないがために、その中では「いま (jetzt)」や「明日 (morgen)」や「ここ (hier)」が用いられないということで、逆に現実の時間・空間関係系の法則内にあることがわかる。ところが、『選ばれし人』ではそうではない。実際に、hier や jetzt が3人称過去形の文中に見いだされるのである。次章でこの点を詳しく見ることになろう。

マンは自作『魔の山』を「時間の小説」と呼んでいるが、ここで取り上げる『選ばれし人』は『魔の山』と同様に、或いはそれ以上に「時間の小説」と言える。先に述べたように、人称、時称の交替は激しく、また例えば「すなわち、第一に、この稿本の読者には多分気づかれなかったであろうが、しかし、注意する価値のあることは、私が読者に、私の座っている場所、すなわち、私がザンクト・ガレンなるノートカーの斜面机に向かっているという場所の指示はあたえたものの、時期、すなわち、救世主生誕ののち、何世紀の何年に私がここに座り、羊皮紙を私の小さな、上品な、学識のある、美しい書体で埋めているのか、それは言わずにおいたということである。(Erstens nämlich mag es dem Leser dieser Handschrift wohl entgangen sein, ist jedoch der Bemerkung wert, daß ich ihn zwar mit der Angabe des Ortes versehen habe, wo ich sitze, nämlich zu Sankt Gallen, an Notkers Pult, daß ich aber nicht gesagt habe, zu welcher Zeitstunde, in dem wievielten Jahre und Jahr hundert nach unseres Retters Geburt ich hier sitze und das Pergament mit meiner kleinen und feinen, gelehrten und schmuckhaften Schrift bedecke.)⁸⁾」というような時間・空間に関する記述が多く見られ、およそ10か所程にある。時間・空間関係系の基点を成す話者＝語り手のいる、「場所の指示はあたえたものの、……時期……それは言わずにおいた」とのくだりは、作者の時間・空間関係に対する並々ならぬ関心を示すものにほかならない。そして何より

もこの作品では、語り手の現れる頻度が非常に高く、まるで語り手が主人公でもあるかのようなのだが、マンの時間・空間構成の鍵は外ならぬ語り手を配しての語りであって、その点からも、マンが時間というものを強く意識してこの作品を書いたことがわかるのである。

ミメーシスと再現の作家、リアリストであるマンが、時間を意識して書いたこの作品において、現実の時間と空間をどのように模倣、再現しているのか、或いはその時間、空間の虚構性、非現実性はどのようなものなのか、すなわち時間の時間・空間関係系がどのように構成されているかを、時間軸の基点「今」と、その依拠する「ここ」を主にして、時間、空間の指示的副詞から分析することは、有効な手段であると考えられる。「時間、空間の副詞は、虚構作品の構造の性質とその非—現実性の論理的特質を明らかにする、特に適した判断基準⁹⁾」なのである。

II. 『選ばれし人』における時間、空間副詞の用法

この章では実際の時間、空間の副詞の用例を見る訳だが、どのような語を取り上げるかを最初に整理しておきたい。

まず前章で述べたように、damals (当時) や da (そこ) といった客観的、中立的な語や、その敷衍である類似の語句は、現実の言説の時間・空間関係系の制約外にあるため、どんな文章で使われても異とするに当たらないので、検討の対象としない。また具体的な地名等による副詞句、例えば「ラテラン宮で (im Lateran)」なども同様の理由から除外する。時代等に関しては、前章で引用した箇所に見るように、具体的な記述がないので問題にならない。

本論では、何よりも現実の時間・空間関係系の基点である「いま (jetzt) と「ここ (hier)」、そしてそれを基点とする時間軸、空間軸の上にある「昨日 (gestern)」、「今日 (heute)」、「明日 (morgen)」、「明後日 (übermorgen)」、及び「彼処 (dort)」に絞りたいと考える。数量を含んだ時間や空間を規定する副詞句、例えば「6週間の後に (nach sechs Wochen)」などは、時間軸、空間軸の延長上にあるものであるから、事例の過剰によって論旨が

不明確になることを避けて、取り上げないこととする。さらに付け加えて言えば、転義的なケース、すなわち前者、後者の意味で用いられた hier や dort 等も除外して考える。

最初に本論の対象である副詞が現れるのは以下の箇所である。

〔例1〕 Ich bin Clemens der Ire, ordinis divi Benedicti, zu Besuch hier als brüderlich aufgenommener Gast und Sendbote meines Abtes Kilian vom Kloster Clonmacnois,……¹⁰⁾ (私はアイルランド人クレメンスというベネディクト派の僧職で、アイルランドなる我が家クロンマクノイス修道院の院長キリアンの使者になり、兄弟の待遇を受ける客としてここを訪れているのだが……)

この文は語り手による1人称現在形の文であり、これを見る限りでは現実の言説とも取ることができる。他の例を見てみよう。

〔例2〕 《(……) Ich gedenke jetzt, drei Stunden überm Sarge meines Bruders zu beten. (……)¹¹⁾》 (わたくしは愛する兄の棺の上で3時間のあいだお祈りをしようと思います。)

これは登場人物のことは直接引用の形にしてあるので、やはり現実の言説としておかしくはない。しかし次のような例も見出せる。

〔例3〕 …… , mischte jetzt Ethelwulf sich widersetzlich ein.¹²⁾ (…… , といまはエテルヴルフが反抗的な態度で干渉し始めた。)

3人称過去形の文である。にもかかわらず jetzt (いま) という語が使われている。これは現実の言説としては明らかに逸脱である。さらに以下のような箇所もある。

〔例4〕 Denn Grigorß hatte heute sein Wappenkleid angelegt,……¹³⁾ (それというのも、グリゴルスが今日は紋章入りの服を着ていたからであった……)

この例でも heute (今日) が3人称過去完了形の文中に現れている。

例3, 4は、これらの文では現実の言説とは違った法則が支配している、言い換えれば現実の言説の時間・空間関係系とは異なった系が存在していることを示すものである。

例1, 2では、言説の時間・空間関係系の基点が「私」と言う者 (der “Ich” -sagende)¹⁴⁾の「いま, ここ」にあり、見かけ上、現実の言説の場合と同じである。しかし例2で「わたくし」と言っている者は登場人物なのだから、この文の時間・空間関係系は虚構上の登場人物の「いま, ここ」に設定されている、虚構、すなわち非現実のそれである。例1の文の「私」は語り手であるが、実は語り手そのものもまた、虚構上のものであって、現実の存在ではない。従って虚構の語り手の「いま, ここ」を基点とする時間・空間関係系もこの物語の中にあるということだが、この系は例2に見る、登場人物の系とは別のものと考えられる。なぜなら語り手は、前章で引用した箇所、「ザンクト・ガレンなるノートカーの斜面机に座って」と彼の言説の空間的基点を明らかにしているのに対し、例2の文で「わたくし」と言っている登場人物の所在は「海の近くの、平地にあるアイゼングライン殿の水城」¹⁵⁾とされていて、スイスの現実の地名であるザンクト・ガレンとは全く異なる場所だということは明白である。つまり語り手の「ここ」は登場人物の「ここ」とは別の「ここ」である。また、ヨーロッパの地理からすれば、ザンクト・ガレンから「海の近くの平地」まではどの方角を考えても数百キロはあり、エレクトロニクス技術の発達した現代ならともかく、これほど離れた場所のことを同時に報告するという設定には無理がある。さらに、既に延べたように「いま」は「ここ」に依存しているのだから、語り手の「いま」が登場人物の「いま」と同一であるとは考えられないのである。

さて再び例3, 4に戻ってみよう。このような3人称過去形の文は、物語や小説の文型としてごく一般的なものである。しかしこの物語の過去形は、現在を表す副詞「いま」や「今日」を含み、上に延べたように、現実の言説であるとすれば文法的逸脱としか言えないような姿を示す。実はこれこそが物語の文の特徴であり、物語では当たり前のことなのである。では、この過去形の文の中に現れた「いま」とはどのような「いま」なのであろうか。これらの文の主語、すなわち行為の主体は登場人物であり、例2の場合もそうである。つまり例3, 4の「いま」, 「今日」とは、虚構の登場人物のそれにほかならず、例2, 3, 4はすべて登場人物の「いま, ここ」を基点とする

時間・空間関係系の内にあるとわかる。この時間・空間関係系は現実のそれとは異なる別の系、まさしく虚構物語の時間・空間関係系なのである。

そして上に延べたように、この物語の中にはもう一つ、やはり虚構の時間・空間関係系、すなわち語り手のそれがあるのだから、『選ばれし人』は2つの異なった、それも虚構の時間・空間関係系で構成されていることになる。以上のことが時間、空間の副詞の用法の検討によって明らかになった。

III. 結論として

前章まで、『選ばれし人』における時間、空間の副詞の用法を、文例に当たりながら検討してきたが、最後に、その結果明らかになったことを総合して、この作品の構造とそれからうかがわれる作家の意図、そしてその実現の度合いを考察してみたい。

作品の時間・空間構造を調べる手掛かりとして、時間、空間の副詞の用法に注目してきた訳であるが、これらの副詞が、語り手の関わる部分、登場人物に関わる部分で、それぞれどのくらいの頻度で用いられているかを、改めて見てみよう。時間構造をさらに詳しく検討するために、語り手の「いま、ここ」を基点とする時間・空間関係系の属する文を、現在形、過去形に分け、登場人物の「いま、ここ」を基点とする系に属する文は、物語の叙述の文と引用符号内の会話文（及び独白、思考内容）とに区別し、さらに会話文も現在形と過去形に分ける。この区分で表を作ってみると、次のようになる。

		hier	dort	jetzt	* heute	
語り手	現在形	9	4	2	2	
	過去形	1	3	0	0	
登場人物	叙述	現在形	0	0	0	0
		過去形	12	11	2	4
	会話	現在形	63	20	8	16
		過去形	7	5	0	* 2

* gestern と morgen を含む。従って会話文過去形の区分の数は gestern の数である。

これで見ると、まずこの作品の時間構造が非常に複層的であることが確認できる。語り手の「いま、ここ」を基点とする時間・空間関係系があり、さらにその中に現在と過去の違いもあって、それを裏付ける副詞が現れている。

登場人物の「いま、ここ」を基点とする系に関しては、同様にその証左である副詞が出現しており、特に会話文では現在形、過去形両方に例が見出された。表では叙述文と会話文を分けて、それぞれにおける現在形、過去形の文に現れる副詞の数を取ったが、叙述文現在形での副詞の出現がないのは、叙述文の現在形そのものが見いだせなかったからである。この点だけを見れば、物語としての一般的な時間構造を有していると言える。しかし Hamburger も言うように¹⁶⁾、物語の過去形は本来の意味での時間的過去を表すものではないのだから、仮に会話文が無く、叙述文だけであるとしたら、物語は現在と過去という時間性を失うであろう。登場人物の会話文の過去形と現在形で、物語は時間性を、そしてそれによる現実らしさを装うのである。時間、空間の副詞は、この現実らしさに寄与している。

しかし、この作品でマンは、本気で物語の内容の本当らしさを意図しているのだろうか。そうであるなら、過去形の叙述文に、非現実の物語であるとの正体を暴露してしまふ、jetzt や heute を用いることは、マンほどの周到な作家であれば、極力避けるであろう。小数とはいえ、確認できたこうした副詞の使用例は、上手の手から水が漏れたのだろうか。筆者はそうは考えない。

『選ばれし人』は周知の通り、中世の聖人譚に題材を採った、一種の再説、パロディーである。人名や語彙、語形は古風で、まさしく中世を装うかのようなものである。語り手による語りも、以前、拙論で述べた、現実味のない話の運びも¹⁷⁾、その装いの一部であるとの見方もできよう。しかし、本論でも記述し、また上記の論文でも指摘したことだが、自ら「物語の精神の肉体化¹⁸⁾」と称する語り手が、己の居る場所の指示は与えるが、時期については言わぬとしているところに、手掛かりが見出せると思われる。筆者は別の所で論じたように¹⁹⁾、マンの、語り手による語りは、物語をするという行為のミメシスであると考えて居るが、『選ばれし人』はさらに進んで、物語りの

行為のパロディーでもあるのではないだろうか。

上の表に見るように、時間・空間の副詞の圧倒的多数を会話文に用いて、その時間性とそれによる現実らしさを補強しながら、一方で上述のように、少しずつ手品のたねを見せるようなことをする。これはトーマス・マンの遊び、従来からイロニーの作家と目されてきた彼の、老境に達しての精緻な、しかし余裕をもった言語的統合の結果なのではないだろうか。

Anmerkungen

- 1) Aristoteles, 1447a.
- 2) Mann, Thomas : Der Erwählte (Ew). In : Das erzählerrische Werke, Taschenbuchausgabe in zwölf Bänden. Frankfurt a.M. 1975. Bd. 2. S. 281.
- 3) 川戸れい子：『選ばれし人』におけるPerspektiveの問題，立教大学ドイツ文学科論集 Aspekt, 12号, 1978. S.38-41.
- 4) Hamburger, Käte : Die Logik der Dichtung. Stuttgart, 1977. S.84.
- 5) Ebd. S.15.
- 6) Hohmeyer, Jürgen : Thomas Manns Roman "Joseph und seine Brüder", Studien zu einer gemischten Erzählsituation. Marburg, 1965. S.7.
- 7) Hamburger, S.105.
- 8) Ew. S.284
- 9) Hamburger, S.105.
- 10) Ew. S.282.
- 11) Ew. S.322.
- 12) Ew. S.334.
- 13) Ew. S.376.
- 14) Baumgart, Reinhard : Das Ironische und die Ironie in den Werken Thomas Manns. München, 1964. S.55-64.
- 15) Ew. S.312.
- 16) Hamburger, S.64ff.
- 17) Kawado, S.43.
- 18) Ew. 284.
- 19) 川戸れい子：トーマス・マンの作品における語り構造－『魔の山』，『ヨゼフとその兄弟たち』，『選ばれし人』，『ファウスト博士』－帝京大学文学部紀要第12

号, 1981, S.267.

Literatur

A. Text

Mann, Thomas : Das erzählerische Werke, Taschenbuchausgabe in zwölf Bänden. Frankfurt a.M. 1975.

B. Sekundärliteratur

Baumgart, Reinhard : Das Ironische und die Ironie in den Werken Thomas Manns. München, 1964.

Hauser-Suida, Ulrike u. Hoppe-Beugel, Gabriele : Die Vergangenheitstempora in der deutschen geschriebenen Sprache der Gegenwart, Heutiges Deutsch 1/4. München, 1972.

Hohmeyer, Jürgen :Thomas Manns Roman "Joseph und seine Brüder", Studien zu einer gemischten Erzählsituation. Marburg, 1965.

Hamburger, Käte : Die Logik der Dichtung. Stuttgart, 1977.